

皆様おはようございます。11月もいよいよ終わりに近づいて参りました。来週からいよいよアドベント(待降節)が始まります。そして1週・2週・3週・4週・・・、その日、クリスマスの礼拝がやってまいります。そんなアドベントを来週に控え、礼拝の時、一緒に主イエス様の恵みを求めながら御言葉に耳を傾けたいと思います。

今日は世界共通の慣用句、「目からウロコ」の元となる話。それが今日の聖書の箇所使徒言行録9章です。よく「目から鱗、目から鱗」と、テレビの情報番組で叫ばれていますけれども、サウル、後にパウロと言われるようになった彼の目からウロコの体験と言うのはどのようなものであったのか今日の御言葉から一緒に味わいたいと願います。

1 さて、サウルはなおも主の弟子たちを脅迫し、殺そうと意気込んで、大祭司のところへ行き、

9:2 ダマスコの諸会堂あての手紙を求めた。それは、この道に従う者を見つけ出したら、男女を問わず縛り上げ、エルサレムに連行するためであった。とこのように書いてあります。

迫害のゆえに散らされて逃げていった人たち。そしてその散って行った地、ダマスコにまで追いかけて行って、そしてこの主イエスキリストを救い主と信じる、「この道に従う者」を見つけ出したら男女問わず縛り上げエルサレムに連行し、そして処罰のゆえに殺害するということも十分に織り込み済みの上で、サウルは主の弟子たちを脅迫し殺そうと意気込んで大祭司の所へ行くとあります。

ハアハアと意気込んで、脅迫と殺意に燃えて、この道に従う者、イエスキリストに従うものを見つけて、殺してやるんだと意気込んでいた彼の姿がくっきりと描かれています。投獄して、その命が失われようとお構いなし。それが私の正義だと彼は信じて進んでいました。

箴言19章21節にはこのような御言葉があります。「人の心には多くの計画がある。しかし主のはかりごとだけがなる」

私たちもまた多くの考えが去来しますけれども、それらひとつひとつが神様の前に正しいかどうかそのことをわきまえることが実に大切だということだと思います。サウルのように過ちを犯して止まるところを知らない、そのような生き方に進んでいくこと。その恐ろしさを思います。戦争に向かっていく国家、そして隠蔽の中に進んでいく企業、賄賂を貪る政治家・官僚など、いろいろなところで誤った道があります。暗闇の中を罪と欺瞞の家を進んでいく、多くの誤った道があります。意気込んで、意気込んで、人を殺しても構わないと言う位の自己中心があります。

9:3 ところが、サウロが旅をしてダマスコに近づいたとき、突然、天からの光が彼の周りを照らした。

9:4 サウロは地に倒れ、「サウル、サウル、なぜ、わたしを迫害するのか」と呼びかける声を聞いた。

強い光がさして、地に倒れ、神の前に立ちおおせない、そういう人間の弱さに直面させられる審判の時があります。そこに神の声があります。「サウルサウル、なぜ私を迫害するのか」

正しき道を行かずして悪しき道を進む、そして正しい人を攻撃する。それは神様を迫害することです。そして後にもう一つ大きな慰めがあります。サウロが主の弟子たちを脅迫してそしてキリストの教会を蝕んでいましたがそのことに対してイエス様はなぜ私を迫害するのかとおっしゃいました。私の教会に対して迫害されるのは私自身が迫害されることであり、主の弟子が痛めつけられるのは、我が身が痛んで、我が体が痛め付けられるように、そのように神様は教会を、主の弟子を、そして私たちを見ていて下さいます。そのようにイエス様自分のこととして教会の苦しみをわかっていて下さると言うのは大きな慰めです。

5 「主よ、あなたはどなたですか」と言うと、答えがあった。「わたしは、あなたが迫害しているイエスである。

6 起きて町に入れ。そうすれば、あなたのなすべきことが知らされる。」

9:7 同行していた人たちは、声は聞こえても、だれの姿も見えないので、ものも言えず立っていた。

9:8 サウロは地面から起き上がって、目を開けたが、何も見えなかった。人々は彼の手を引いてダマスコに連れて行った。

彼は何も見えていませんでした。正しいことを知りもせず見えもせず全て見えていると思っていた事は所詮何も見えていなかったのです。彼は自分の意のままにすることばかり考えていましたが、彼は真理が何も見えていなかったということにこの時端と気づかされるのでした。科学技術が発展し思想文化芸術が発展し花開いたとしても人間は神様を知ることなく、そうして目が開かれているとは言い難い、それぐらいにさまよい進む存在であるということがここから示されます。サウルは、旧約聖書よくよく読んで有名なお師匠様のもとで研究してそして飛ぶ鳥を落とす勢いの若手のホープ。しかし彼は自分が何も見えてはいなかったと言うことにここで気づかされるのです。

私がこの手で迫害していたのは、生ける神であった。その恐ろしい事実を目の前に突きつけられ目も見えず、愕然として崩れ落ち、そして目を開けても何も見えず人々から手を引いてもらえなければ歩くことができない、そういう境

遇に置かれていました。立派だ、偉い、目が開かれて何も何事も知っていると思った彼は何も見えない無力な存在であるということを突きつけられるのです。

9:9 サウロは三日間、目が見えず、食べも飲みもしなかった。

まさに暗黒の中に落とされる思いがして、彼は生きる気力を一切失いました。神の裁きの中に落とされたように、生きる気力を失って、絶望して、実に三日間飲まず食わず彼はまさに死んだような状態に陥っていました。このままの状態であれば彼は生き続けることができなかつたでしょう。

そこに神様の救いの御手が伸ばされます。

9:10 ところで、ダマスコにアナニアという弟子がいた。幻の中で主が、「アナニア」と呼びかけると、アナニアは、「主よ、ここにおります」と言った。

9:11 すると、主は言われた。「立って、『直線通り』と呼ばれる通りへ行き、ユダの家にいるサウロという名の、タルソス出身の者を訪ねよ。今、彼は祈っている。

9:12 アナニアという人が入って来て自分の上に手を置き、元どおり目が見えるようにしてくれるのを、幻で見たのだ。」

9:13 しかし、アナニアは答えた。「主よ、わたしは、その人がエルサレムで、あなたの聖なる者たちに対してどんな悪事を働いたか、大勢の人から聞きました。

9:14 ここでも、御名を呼び求める人をすべて捕らえるため、祭司長たちから権限を受けています。」

9:15 すると、主は言われた。「行け。あの者は、異邦人や王たち、またイスラエルの子らにわたしの名を伝えるために、わたしが選んだ器である。

9:16 わたしの名のためにどんなに苦しまなくてはならないかを、わたしは彼に示そう。」

9:17 そこで、アナニアは出かけて行ってユダの家に入り、サウロの上に手を置いて言った。「兄弟サウル、あなたがここへ来る途中に現れてくださった主イエスは、あなたが元どおり目が見えるようになり、また、聖霊で満たされるようにと、わたしをお遣わしになったのです。」

9:18 すると、たちまち目からうろこのようなものが落ち、サウロは元どおり見えるようになった。そこで、身を起こして洗礼を受け、

9:19 食事をして元気を取り戻した。

これが世界ではじめての目から鱗と言う出来事でした。彼はまさに罪の中にあり、命の危機の中にありました。自らの過ちをつくづく知らされて、愕然とし絶望しそして生きる気力を全く失って死ぬばかりでした。その罪人の姿、

その中に神様の赦しが注がれ、そして聖霊が与えられ、そして目が開かれて見えるようになったのです。肉体の目は前から開いていて、世の中の物事全てを見ていたと思っていきましたが、心の目、霊の目が閉ざされていて神様のことに對しては何もわからなかったのです。しかし彼は今聖霊によって心の瞳が、霊の目が開かれて見渡すことができるようになりました。

罪の許しの中にあつて、頑迷な神を神としない人間が、死ぬばかりに弱って絶望して立ち上がることも出来なくなってしまう人間が、神様の赦しによって、光によって、贖いの命によって目が開かれて、そして物事をわきまえ知ることができるようになった出来事。これこそが世界で最初の「目からウロコ」の出来事でした。

19 サウロは数日の間、ダマスコの弟子たちと一緒にいて、

20 すぐあちこちの会堂で、「この人こそ神の子である」と、イエスのことを宣べ伝えた。

つい先日まではあなたの主の弟子たちを脅迫し、殺そうと意気込んで、大祭司のところへ行き、大祭司の手紙をとって主の弟子たちを次々と獄に投げ入れていた彼が、その迫害していたはずのイエス様のことを、「この人こそ神の子である」と語り始めたのです。

イエス様は「イスラエルの子らにわたしの名を伝えるために、わたしが選んだ器である」とサウルのことを言いましたけども、神様はまことに不思議なことをなさるお方です。この神様のもとに、赦されることのできない、更正不可能な人は誰一人ありません。

そしてご自分の名を伝えるために選ばれる神の器が、神様にはまだまだ必要なのではないのでしょうか。

サウルのように悩みのゆえに、自らの至らなさの罪のゆえに、どん底にいて、絶望の中で生きる力もなく立ち上がることもできずに、手助けを必要として呻いている方々が今もおられるのではないのでしょうか。神様、私たちをその方のところに遣わしてください、手を置いて癒しと平安のために祈ります、目が開かれるように、聖霊が注がれるように祈りますから、私たちをアナニヤのように、私たちをどうか遣わしてください。そしてあなたの素晴らしい御名を語るために尊い器をあなたがまた一人、また一人とお導き下さいと、私たちは祈り続けていきたいと願います。